

漢法苞徳塾資料	No. 277
区分	診断論・望診
タイトル	蒙色十則：望診の共通項について
著者	八木素萌
作成日	

◇診察において望診は重要な部門である。

望診には

- イ) 色を診る
- ロ) 形を診る
- ハ) 動きを診る
- ニ) 「真気」を診る

などがある。

望診の中でも「蒙色診」と言われる「色を診る」のは・尺膚診＝尺皮診・と・顔面診・を中心として多くの記述があって、古来より行なわれて来た。

「色」を診るのは・背部・でも・腹部・でも・胸部・でも・四肢その他全身いたるところの皮膚であり、それが観察の対象となっている。舌や頬粘膜なども「色診」の対象である。

◇『望診遵経』（清・汪宏菴）は、書名の通り『経』＝『黄帝内经』・『傷寒論』に法とって、望診の全ての領域をカバーし敷衍している。「～蓋シ其ノ気色ヲ察シテ・其ノ生尅ヲ分カチ・固リテ其ノ病ノ順逆症ノ従違ヲ知ルナリ～」と記してのち、「蒙色十則」を説明している。この観点は診察の共通項の意味を帯びていると思うので以下に紹介する。

浮・沈～～～病の表裏

「色皮膚ノ間ニ顕ワルル者ハ之レヲ浮ト謂イ、皮膚ノ内ニ隠ルル者ハ之レヲ沈ト謂ウ。浮ハ病表ニ在リ、沈ハ病裏ニ在リ、始メ浮ニシテ後沈ム者ハ、病表ヨリ裏ニ之ク、始メ沈ニシテ後浮スハ、病裏ヨリ表ニ之ク。此レ浮沈ヲ以テ表裏ヲ分ツナリ」。

清・濁～～～病の陰陽

「清ハ清明・其ノ色舒ナリ、濁ハ濁暗・其ノ色惨ナリ、清ハ病陽ニ在リ・濁ハ病陰ニ在リ、清ヨリシテ濁ルハ陽病陰ニ入り、濁ヨリシテ清トナルハ陰病陽ニ転ズ。此レ清濁ヲ以テ陰陽ヲ分ツナリ」。

微・甚〜〜病の虚実

「色ノ浅淡ノ者ハ之レヲ微ト謂イ、色ノ深濃ノ者ハ之レヲ甚ト謂ウ、微ハ正気ノ虚・甚ハ邪気ノ実、微ヨリシテ甚ナルトキハ先虚ニシテ後実ナリ、甚ヨリシテ微ナルトキハ先実ニシテ後虚ナリ。此レ微甚ヲ以テ虚実ヲ分ツナリ」。

散・搏〜〜病の遠近

「散ハ疏離ニシテ其ノ色開クナリ、搏ハ壅滞ニシテ其色閉ジルナリ、散ハ病近クマサニ解シ・搏ハ久シクシテ漸ニ聚マレリ、先搏ニシテ後散ノ者ハ病久シト雖ドモマサニ解スベシ、先散ニシテ後搏ノ者ハ病近シト雖ドモ而シテ漸ニ聚マラン。此レ散搏ヲ以テ久近ヲ分ツナリ」。

澤・夭〜〜病の成敗

「気色ノ滋潤ナルモノ之レヲ澤ト謂イ、気色ノ枯槁ナルモノ之レヲ夭ト謂ウ。澤ハ生ズル事ヲ主サドリ、夭ハ死スル事ヲ主サドル。マサニ夭ニシテ漸ニ澤タルモノ精神ノ復シテ盛トナリ、先ニ澤ニシテ漸ニ夭タル者ハ血気ノ益々衰エタラン。此レ澤夭ヲ以テ成敗ヲ分ツナリ」。

「蓋シ十法ハ其ノ色ノ気ヲ辨ズルナリ、五色ハ其ノ気ノ色ヲ辨ズナリ、気ハ色ノ変、色ハ気ノ常、気ハ色ニ因リテ其ノ理始メテ明、色ハ気ニ因リテ其ノ義乃ワチ著ワル、気ナリ色ナリ。分チテ之レヲ言ウトキハ則チ精微ノ道頭ワル。合シテ之レヲ観ズレバ則チ病症ノ変彰ラカナラン、此レ気色ノ提綱ナリ〜」。

◇内外相応

「〜以テ五色ハ外ニ形ワレ五臓内ニ応ズト為ス。ナオ根本ノ枝葉ニ与ウガ猶キナリ。色脈形肉ハ相イニ失スルコトヲ得ザルナリ。故ニ病有レバ必ラズ色アリ、内外相襲シテ陰ノ形ニ随ガウガ如ク鼓ノ桴ニ応ズルガ如シ〜」。

◇陰と陽

「〜以テ六部ヲ分カチテ之レヲ言エバ、外ハ上ハ左ハ皆陽ト為シ、内ハ下ハ右ハ皆陰ト為ス。以テ十法ヲ分カチテ之レヲ言エバ、浮清甚散澤ハ陽ト為シ、沈濁微搏夭ヲ陰ト為ス。〜」

「〜陽清陰濁、陽升陰降、陽熱陰寒、陽動陰静、陽外陰内、陽上陰下、陽左陰右、陽道実、陰道虚、陽常有余、陰常不足、是以色見諸陽者易治、見諸陰者難療、外感陰病見陽色者易治、陽病見陰色者難療、内傷陽病見陰色者易治、陰病見陽色者難療、凡此陰陽之理、既可合気色部位以相参、亦可合臟腑病症以相證者也、易伝曰、一陰一陽之謂道、陰陽不測之謂神、内経曰、得神者昌、失神者亡〜」。

(〜陽ハ清ナリ陰ハ濁ナリ、陽ハ升リ陰ハ降ル、陽ハ熱ニシテ陰ハ寒ナリ、陽ハ動ニシテ陰ハ静カナリ、陽ハ外ニシテ陰ハ内ナリ、陽ハ上ニシテ陰ハ下ナリ、陽ハ左ニシテ陰ハ右ナリ、陽道ハ実シ、陰道ハ虚ナリ、陽ハ常ニ有余ニシテ、陰ハ常ニ不足ナリ、是レヲ以テ色ノ諸陽

ニ見ワルル者ハ易治ニシテ、諸陰ニ見ワルル者ハ難療ナリ。外感ノ陰病ニ陽色ノ見ワルレバ易治ニシテ、陽病ニ陰色ノ見ワルル者ハ難療ナリ。内傷ノ陽病ニ陰色ノ見ワルル者ハ易治ニシテ、陰病ニ陽色ノ見ワルル者ハ難療ナリ、凡テ此レハ陰陽ノ理ナリ、既ニシテ気色ト部位ヲ合シテ相イ参ジユベシ、亦臟腑ト病症ヲ合シテ以テ相イ證スベキ者ナリ、易伝ニ曰ク一陰一陽之レヲ道ト謂ウ、陰陽ノ測ラレザル之レヲ神ト謂ウト。内経曰ク、神ヲ得ル者ハ昌エ、神ヲ失スル者ハ亡ブト～)。

◇尺皮診 (=尺膚診) について

『素問』『靈枢』『難経』に記述されており、また引き継がれて来ている。尺部（前腕の前側）の皮膚の様子を観察し診断する方法と理論である。これは五臓と病因の判断には便利であるので、以下に紹介する。

- ◆『内経』には、尺皮と脈との間には矛盾がないと見ているものと、矛盾する乃至は意味する所が異なると見ているものがある。『難経』は矛盾しないという見解である。皮膚表面は経絡学説から言えば、「絡」と「孫絡」の部であり、経脈はやや深部を行っているのを見えないものである。従って尺膚診（尺皮診）は尺皮つまり尺部での「孫絡」や「絡」を診ている事となる。この点から尺皮の診察と脈診とは意味する所が異なるという見解も成立する。故に、この点も考慮して「尺皮診」を行なう必要がある。とは言え、日常的には『難経』の方法で事足りるので、『難経』の論を紹介する。

五臓	肝	心	脾	肺	腎
脈	弦而急	浮大而散	緩而大	浮濇而短	沈濡而滑
色	青	赤	黄	白	黒
尺皮	急 コワバツテ イル状態	数 熱ヲ帯ビテ 赤イ状態	緩 弛緩シテ弾 カナイ状態	濇 シブリ収斂 スル状態	滑 湿リ気味ニシツ リト冷タイ状態
五気	風	熱・暑	食勞及び湿	燥（涼）	寒（冷湿）

◇腹部と蒙色

腹部における病の反応は、腹部の形状・色調・皮膚の弾力・正中の状態・臍の状態・腹壁の緊張状態や硬結や虚軟陥下などの反応や温度分布・主要診察反応点の圧・撮・擦・撫などによる反応の状態、などと多様な多面的なものとして出現している。これ等を種々の方法で観察するのが、「腹診法」であり、腹部蒙色はこの腹診の一部である。何よりも『健全な腹形』を知って置く事が大切である、男性は男性なりに女性は女性なりに、また老若なりに年齢相応に、肥瘦なりに『健全な腹形』は、凹凸は滑らかで、且つ、なだらかで少しの不自然さも無い、そして如何にもスッキリとした引き締め方を

している。これに対して疲労したり病気があったりの場合の腹は、ダラリと力無かったり、反対に異常な緊張状態であり、不自然な凹凸があり、色調もスッキリとしていない。また、硬結や虚軟陥下なども見え、温度分布にも異常が診られる等々である。『健全な腹形』をしていれば問題はない。蒙色もこの範疇を構成するものである。

◇背候診と蒙色

基本的には腹診と同様のものである。腹部にも五臓の配当があり背部にも五臓の配当がある。部位の帯びている意味を知っておく事が必要であるのは言うまでもない事である。

◇面部の蒙色

皮膚の色調の変化は、基本的には尺皮診の見方と同じであり、これは全身的なものである。望診の書に記述されている事は、大部分が顔面部の色調の変化の問題である。部位の持っている意味がかなり複雑であるから、専門書で学習して欲しい。

基礎は全て『内経』にあるものである。丸山昌朗の『素問の栞』に、『素問』『靈枢』における記述を図示している。『素問』刺熱論第 32、『素問』風論第 42、『靈枢』五色第 49、『靈枢』五閱五使第 37、の諸編から作図したものである。歴史を経て次第に部位の意味の配当の把握は、定まってきたと言えるが、出発点の認識には大きな意味があるものである。近年のものでは『望診遵経』、『四診抉微』（清・林之翰）、『四診秘録』（清・欣澹庵）は良い参考書であると思う。

◇体表の色調を診て、病とその病因や病位や病の順逆や予後を判断すると言う事、また、治療の効果を判断すると言う事、これは共に大切なものである。重要な事は、季節の五行性・病の五行性・病因の五行性の持っているシンボル性は、身体の生理的反応の持っている五行性を媒介にした表象として現象するものである事を、認識する事である。『臟象論』はこれの専門的な研究の分野である。